

信仰と民俗芸能

—長滝の延年—

小川和英

On a relation between religion and folk-entertainments
— a Case of Nagataki-jinja —

Kazuhide OGAWA

1. はじめに

岐阜県には、風土や歴史を異にする数多くの地域社会が存在する。これらの地域には、その風土や歴史の影響を受けながら、多様な様相を持つ民俗芸能が、形成され伝承されている。

民俗芸能の形成や伝承は、信仰の力に依るところが大きいと思われる。それは、ほとんどの民俗芸能が、祭りにかかわって行われていることから分かる。そのかかわり方は、祭りそのものの場合や、祭りの中で重要な役割を果たしている場合、また祭りの余興として行われている場合など多様な形態を示している。

今回は、全国的に見ても数少ない延年が現在も行われている郡上郡白鳥町長滝の白山長滝神社の六日祭を調査し、その状況を明らかにしたい。さらに、延年が伝承されてきた理由を考えてみたい。

なお、この調査には、長滝地区の区民の方々・白山長滝神社宮司若宮多門氏や岐阜大学助教授伊東久之氏のご協力・ご教示を得た。以上の方々には心からお礼申し上げる。

2. 白山長滝神社

白山山系の山々は、美濃・飛騨・越前・越中・加賀の5カ国にまたがり、山霊を感じさせるような秀麗な山なみを示し、また、長良川・手取川・九頭竜川・庄川の水源でもあり、農耕に必要な水をもたらすなど、古来から信仰の対象になっていたと思われる。

白山の修験道の開祖は、泰澄大師であるといわれており、養老年元(717)に白山への道を開き、白山山頂に白山妙理大権現をまつって本宮とし、長滝に中宮(数年後、「白山本地中宮長滝寺」と号する)を創建したといわれている。

9世紀には、法相宗から天台宗に改宗し、平安後期には天台別院となった長滝寺は、白山中宮として神仏習合の最も典型的な白山信仰の霊場として、加賀白山本宮・越前平泉寺とならんで広く知られるようになり、東山・東海道筋の諸国から白山詣でをする人々の登拝口として隆盛をきわめた¹⁾。それに伴って、寺領の荘園が増大し、経済的にも豊かになっていった。しかし、戦国期に入ると、荘園の崩壊や浄土真宗の浸透などにより、衆徒らの離脱も起こるようになってきた。

明治になると、神仏分離令によって、長滝寺と白山長滝神社(社家の若宮家を中心に氏子制度をとる)に分かれた²⁾。

3. 長滝の延年

(1) 延年とは

まず、延年とはどのようなものであるかを考えてみたい。「延年」という言葉は、年(寿命)をのばす、という意味である³⁾。『史記』の淮南衡山傳の中に、「願請延年益壽薬」とあるは、この意味による⁴⁾。ところが、延年の言葉はいつの間にか、一つの催しに対しても用いられるようになった。例えば、『庭訓往来』の中に「花鳥風月者、好士之所_レ学、詩歌管絃者、遐齡延年之方也」とある。

最初は、貴族社会の遊宴歌舞に対して使われていたが⁵⁾、『明月記』の中に「山門衆徒遊宴^{體・延}」とあるように⁶⁾、後には、主に山門衆徒の遊宴歌舞に対して用いられるようになった。この遊宴歌舞は、山門衆徒たち（僧侶や稚児）が修正会・維摩会・蓮華会などの法会の後の芸能として行ったもので、一山をほめ、寺の守護神をたたえ、千秋万歳を祈ったものと思われる⁷⁾。

平安末期から鎌倉期へかけて、それまで寺により、または時によってさまざまであった延年の芸能の内容が、風流と開口・当弁・連事を主とする演目に次第に定まり⁸⁾、室町期に至るまで、奈良・京都付近の東大寺・興福寺・多武峯・園城寺などの大寺院を始め、地方の寺社でも盛んに行われた。しかし、かつては盛大であった奈良興福寺の延年も、元文4年（1739）を最後に絶えてしまった。

本田安次氏は、延年の芸術史上の位置について、「延年の諸舞は、……近世の諸舞台芸術が、やがてととのえられた形をとるに至る過渡期の姿をとどめているものとして、これらは芸術史上にもはなはだ重要な資料であると思う⁹⁾」と述べている。

なお、昭和60年5月1日現在で、延年として国の重要無形民俗文化財の指定を受けているのは、毛越寺の延年（岩手県）・小迫の延年（宮城県）・根知山寺の延年（新潟県）・長滝の延年（岐阜県）である。それ以外に中尊寺の延年（岩手県）・日光輪王寺の延年（栃木県）などがあるが、数は少ない。

(2) 長滝の延年の始まり

長滝の延年は、いつ頃どこから伝わってきたのか明らかでないが、しかし、その伝来については、いろいろと推測することができる。まずどこの影響を受けたかについて、坪井市次郎氏（元白鳥町史編集主任）は、「白山中宮長滝寺は平安時代、比叡山延暦寺の別院であったことから、あるいは同寺から伝わったのではなかろうか¹⁰⁾」と述べている。また若宮多門氏（白山長滝神社宮司）は、奥州藤原氏の影響が考えられるのではないだろうか¹¹⁾と述べている。その理由として、①、藤原秀衡は白山を信仰しており、現在も毛越寺・中尊寺で延年が行われている。また越前馬場は平泉寺と号している。②、白山長滝神社に現存する鎌倉期の能面（女面）と中尊寺の同時期の能面（女面）とは、裏がよく似ている。③、白山長滝神社の焼失前の梵鐘は、秀衡寄進と伝えられている。④、石徹白の虚空蔵菩薩も、秀衡寄進と伝えられている。なお、この仏像は、職人たちが、奥州から来て铸造し、その後、そのまま住みついたと言われている。現在も、先祖が藤原氏であるという人がいる。⑤、神輿の金具（透彫）が似ている。以上の点を上げている。なお、若宮氏は、延暦寺から長滝へ、さらに奥州藤原氏へ影響を与えたとも考えられると述べている¹¹⁾。

次に、始まった時期について検討したい。経聞坊慶祐が慶安元年（1648）3月に書いた「修正延年並祭礼之次第」（以下慶安本と略す）の末文には、「天文已来之例改委爰書付侍也、昔ハ莫太之寺領取持、開山之伝記通依^レ執行^レ義識正¹²⁾」と記され、天文年間（1532～55）以前から延年が行われていたことが分かる。また、この慶安本によると、行われた日は、正月6日である。これは大歳から1週間の間、正月をむかえての修法が行われ、7日目の6日の日に、修正会が挙行される。この日には宴会が開かれ、若輩衆が中心となって延年が行われた。

(3) 六日祭の準備

次に、現在の六日祭の状況について述べてみたい。

① 12月25日

総代・回総代（4名一任期1年、くじ引きで1人3カ月ずつ責任を持つ）・宮司などが、社務所で祭りの役割を相談し、決定する。役割は、当弁・御歌・太鼓・笛・酌取・露払・乱拍子・田打・大

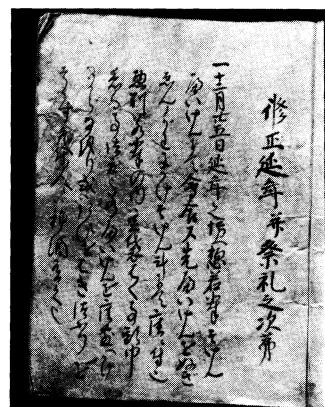


写真1 「修正延年並祭礼之次第」

衆舞・衣裳方・繰出・指導役・銚子巻・手水係・祭員・受付・立役・楽屋番・宝物殿係・篝火係・雪踏などで、最低1軒に1人の割で当たり、長滝地区全員で行う態勢である。昭和61年の場合は、延べ74名の人が、役についている。なかには2つ以上の役をしている人が6名いて、実質68名である。役につく人は、ほとんどが男性で、特に役者は主に若い男性になる。なお、慶安本でもこの日に、一山の若輩衆が延年を行うにあたっての諸役について協議している。

② 12月26日

前日の決定を地区中に触れて回る。なお、役者・笛・太鼓に決まった人は、指導者について随時練習を始める。

③ 12月29日

餅つきを行い、祭りに用いる餅も一緒に作る。

④ 12月30日

大掃除を行う

⑤ 12月31日

大祓式を行う

⑥ 1月1日

元旦祭を行う

⑦ 1月2・3日

2・3日の両日は、花笠作り・銚子巻などの準備が進められ、一方、拝殿では舞の練習が行われる。

ア 花笠作り

1月2日朝から、白山神社境内にある長滝コミュニティセンター（以前は阿名院で行っていたが、老朽化したため、取り壊し、同じ場所に建てた）に長滝地区の全戸から1人ずつが集まり、花笠（桜・菊・牡丹・椿・芥子）作りの作業を行う。昔は男性だけであったが、今は女性も混じる。なお、家に不幸があった人は遠慮する。以前は、世話役から組に割り当てがあり、それを個人が請負って作った。作っている部屋（デイ）には女性を入れなかった。

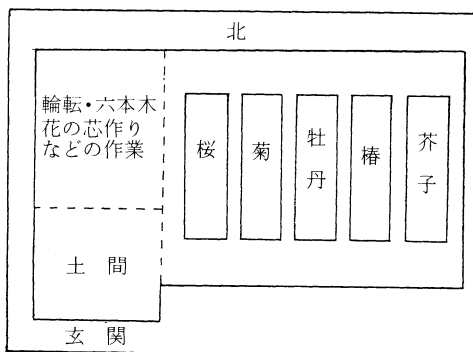


図1 長滝コミュニティセンターでの作業位置

長滝地区は4つの組から成っており、それぞれ1つずつの花笠を作るが、残った1つについては、各組から数名ずつ集まり、他の花笠と同時に作製する。また、どの花笠を作るかは、毎年くじで決定する。昭和61年のコミュニティセンターでの作業位置は図1のようである。昨年までは、組の位置が決まっていたが、今年からは、花笠の作業位置を毎年同じにし、組の方が動くようになった。なお、花笠の作業位置は、拝殿で吊す位置と同じである。

①. 材料

材料は、「昭和四拾伍念 六日祭花の覚」によると、次のようになっている。ただし、本文中に「青」と書いてあるのは、実際は「緑」である。

なお、本文中の追筆は「 」, 見せ消しには文字の上部にゝゝを付け、その後の（ ）の中に、書き改めた文字を加えた。

櫻

- 一、櫻紙五帖 一、赤紙四十枚 一、障子紙半帖 一、金紙一枚 一、赤染粉一袋 一、竹三十六本 「黄二 青三 青厚紙二 赤厚紙二 白厚紙二」

椿

一、障子紙一帖 一、赤紙四十枚（厚三十枚 薄十枚） 一、青紙四十枚（十枚 薄紙四十枚）
「白紙小奉紙三十枚」 一、金紙一枚 一、竹三十本（三十六本）

菊

一、障子紙二帖（三帖） 一、金紙十二枚 一、銀紙十二枚 一、赤紙三十枚 「一、白紙 小奉紙三十枚」 一、青紙四十枚 一、竹三十六本

けし

一、障子紙一帖（二帖） 一、赤紙「厚二枚」三十枚 一、青紙「厚二枚」四十枚「薄十枚」
一、金紙一枚 一、竹三十六本

牡丹

一、障子紙一帖（二帖） 一、赤紙三十枚（厚紙二枚） 一、青紙六十枚「厚紙別二枚」 一、
金紙一枚 一、竹 元竹三十六本 一、むらさき染粉一袋

④. 作り方

まず、藁をドーナツ型にして2個作り、その上に白い紙を貼る。その間に細長い板を3枚交差させ、その回りを細竹で丸く囲み、その上を全て白い紙を貼り円板状にする。これを輪転という。すなわち花笠の芯である。これに吊り縄を結ぶ。この輪転に、長さ51cmぐらいの細長い木6本を六角になるように差す。この木を六本木という。なお、この木は白紙で包み、その上に、細長い赤紙と緑紙とを巻く。その結果、白・赤・白・緑という具合になる。先端には金紙を貼る。この巻き方は、左巻きと右巻きとがあり、それぞれ3本ずつ作り、交互に差す。さらに六本木の間あたりに、竹を渡し、その下部に、白・赤・緑の紙を1ますごとに貼る。その先端には、金紙を貼る。次に、円板の縁に約84cmのシデを付ける。シデは「五段三かき下げ」である。シデを付けた円板の縁に、赤・緑の紙を小さく切って貼る。これに、造花を付けた枝を差す。

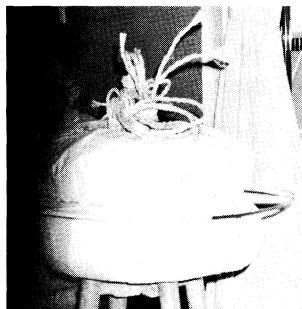


写真2 輪転



写真3 シデ作り

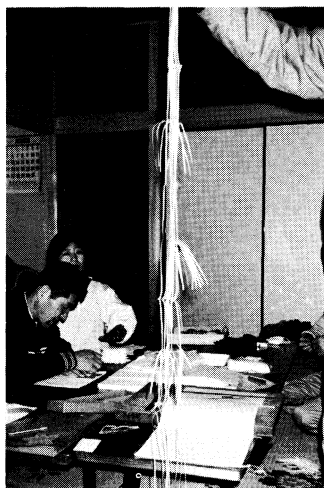


写真4 シデ

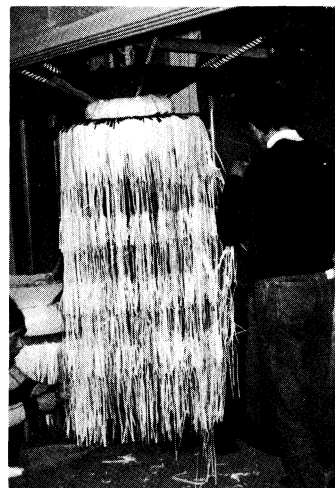


写真5 輪転に六本木とシデを付けた

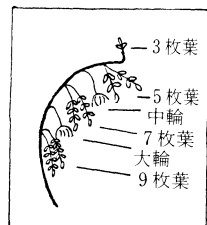
造花及び枝の作り方は、次のようである。

桜一桜の花の型に合わせて、桜紙を切り、花を作る。赤紙でこより（先端を少し残す）を作り、花（2枚重ねてある）の中心に差す、これを2つ結び合わせる。きびを小さく切り、それに赤紙を巻き、サクランボを作る。細竹の頭にサクランボを付け、それを細長い赤紙で巻き付け、さらに、花を巻き込み、桜の枝を作っていく。この枝は36本で、それを輪転に差す。さらに、この枝に短冊を吊す。

菊—菊の花の芯は、木を丸く小さく切り、それに、小さな竹を差す。木の表面にはキハダを付けて作る。この芯に、菊の花の型に合わせて切った紙（縁に小さな切り込みを全部に入れる）を、重ねて付けていく、重ねる枚数は、5枚と7枚で、紙の色は、白・赤・金・銀の4種類である。細竹の頭に花を付け、それを細長い緑紙で巻きつけ、さらに葉・つぼみを巻き込み、菊の枝を作っていく。この枝は36本で、それを輪転に差す。なお、紙の色・重ねる枚数・葉の数は、次のように決まっている。「銀 五段作り 葉七枚、白大 七段作り 葉五枚、白小 五段作り 葉六枚、赤 七段作り 葉五枚、金 五段作り 葉七枚¹³⁾」



写真6 菊の花作り



牡丹—牡丹の花びらの作り方は、切った紙を二つに折り、布の中に入れ、その真中を左手で押え、布の右端と左端を右手で交互にしぼる。色は赤と白である。また一方では、花の芯を作り、花びらと合わせて、牡丹の花を作る。元竹を枝の形に曲げ、まず三枚葉の小枝1本を、元竹の頭に細長い緑紙で巻き込む。次に、五枚葉の小枝2本、花の中輪、七枚葉の小枝2本、花の大輪、九枚葉の小枝2本を順に巻き込んで作りあげる。この枝は18本で、これを輪転に差す。

図2 牡丹の作り方の図

椿—椿の花びらは、先端を曲げ、五角になるようにする。花の芯を作り、花びらと合わせて、椿の花を作る。枝は、つぼみを頭に付け、葉と花を付けていく。枝は36本で、これを輪転に差す。

芥子—芥子の花びらは、しぼりを入れて作る。花の芯を作り、花びらと合わせて、芥子の花を作る。枝は花を頭に付け、葉を付けていく、これを輪転に差す。

①. 売り花作り

それぞれの花笠作りが終わったあと、売り花を作る。売り花は、六日祭の当日に境内で売るもので、それを全員で作る。花は菊だけで、色は赤と白である。豊蚕によいと言われ、かつては、郡上一円から買いにきた。共同で売ようになったのは、数年前からで、以前は各自、自由に花小屋を作って売った。

㊦. 銚子巻

銚子巻とは、延年で毎年使用する用具を飾り付けることを言う。この名称は、酌取りに使う長柄の銚子を飾り付けるところからきていると思われる。なお、この作業は、銚子巻係の人が、花笠作りが終りかけた頃の3日午後と5日の午前中に行う。

㊦. ①. 材料

前掲の「六日祭花の覚」によると次のようになっている。なお、この資料では「桃子巻」と書かれている。

- 一、大奉書六枚 一、小奉書十枚 一、上等障子紙一帖 一、赤紙三十枚 一、障子紙中四帖
- 一、紅白水引大二十本小二十本 一、モットギ白五十本 一、黄紙十枚 一、カシヨブ二枚 一、ノリー袋

また、「當辨」として次のように書いてある。

- 一、小奉書十枚 大幣 一、障子紙二帖 シデ 一、赤紙二十枚 小幣 一、青紙二十枚 小幣 一、金紙一枚 一、銀紙一枚（小幣切方の項に、「梅 赤紙3枚 青紙2枚 竹は青紙3枚 赤紙2枚」とある）

㊦. ②. 作業

三日月・行灯—三日月の銀紙を貼り変える。行灯（高さ約42cm・幅約34cm）の紙を貼る。これらは、三蓋松とともに菓子台の所に置かれる。

長柄の銚子・ひさげ—長柄の銚子2個と、ひさげ2個に、それぞれ紙と水引で作った雄蝶・雌蝶を付け、持ち手の部分に、白紙を巻き、その上を、白の水引で巻く。5・7・3となるように巻き、最後に止める。これらは、酌取りで使用する。

抱瓶子—抱瓶子の上に、梅の花の形に切った紙を置き、その上に、雄蝶・雌蝶を置く。慶安本では「抱瓶子蝶花形に口を包」とある。これは菓子台の横に置く。なお、この抱瓶子は、朱根来塗で、県の重要文化財に指定されている。

当弁竿—当弁竿は、丁字形で柄のたて棒は約2m、綾棒（横棒）は約1m強である。たて棒には、六本木と同じように、白紙を巻き、その上に細長い赤紙と緑紙を巻く。中央よりやや下部に白紙を巻き、先には御幣（大幣）を付ける。そして、綾棒の前後にシデを付ける。梅の持つ竿の両端には、赤い御幣（小幣・なかに緑紙も入れてある）、竹の持つ竿の両端には、緑の御幣（小幣・なかに赤紙も入れてある）を、それぞれ付ける。

当弁の冠—梅の冠（立烏帽子に梅を図案化した作り物で、幅約88cm、高さ約63cm、先端に赤いつぼみの作り物）と、竹の冠（立烏帽子に竹を図案化した作り物で、幅約110cm、高さ約72cm、先端に竹の葉の作り物）を、それぞれ補修する。

太刀—木製の太刀に、部分的に金紙を貼る。これは露払いに用いる。

鍬・鎌—木製の鍬2個（大一柄の長さ約102cm、鍬幅約32cm、小一柄の長さ約89cm、鍬幅約28cm）と、木製の鎌2個（柄の長さ約36cm、刃長約22cm）のそれぞれの柄の部分を白紙で巻き、その上に細長い赤紙・緑紙を巻く。その中央部に白紙を巻く。これらは、しろすりに用いる。

さらに、長柄の銚子・ひさげ・当弁竿・鍬・鎌などには、昆布と松葉を常若の葉で巻き、水引で結んだものを付ける。

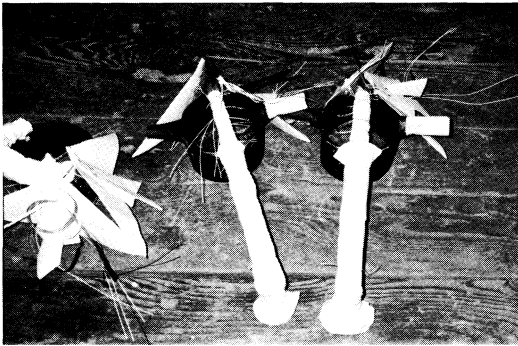


写真7 長柄の銚子

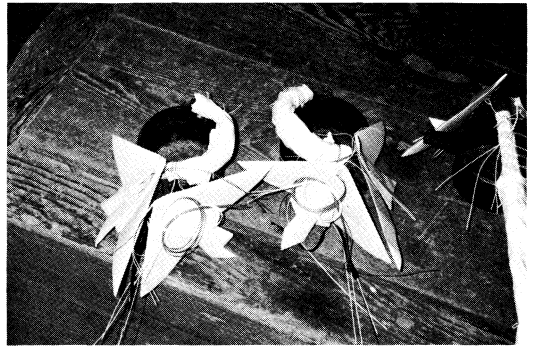


写真8 ひさげ

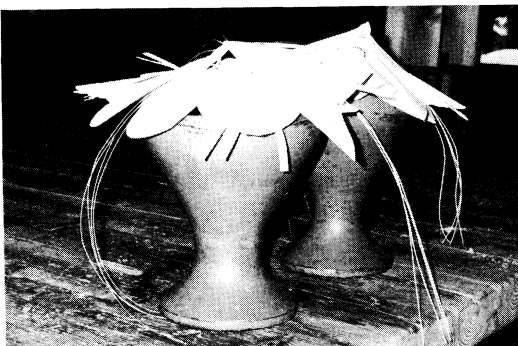


写真9 抱瓶子



写真10 当弁の冠

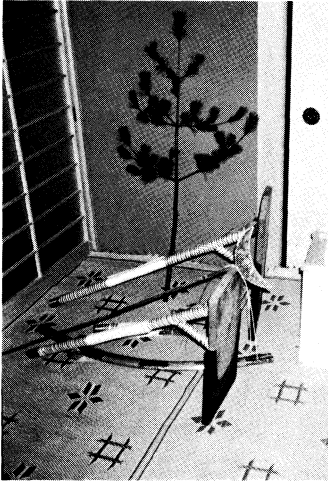


写真11 鉞・三日月・太刀など



写真12 当弁竿飾り付け



写真13 当弁竿

⑧. 1月5日

午前中は、銚子巻の続きの作業と、幟たてを行う。

午後は、延年の総練習で、6日と同じ衣裳・用具を使って本番と同じように行われる。

⑨. 1月6日

作業は、早朝の午前5時以前から始まる。

⑦. 花笠取り付け

拝殿（本殿から少し離れた正面に南面して建てられており、約半分は土間で、奥に高さ1m余の床が張られている）の土間の上にある花笠取り付け用の竹をおろし、それに、西側（本殿に向かって左側）から順に、桜・菊・牡丹・椿・芥子の花笠を取り付ける。

①. 菓子盛り

菓子盛りは、まず、菓子台（約121cm×約164cm高さ約47cm、足は取れるようになっている）を中央に置く、その周囲と上に白紙をたてに敷く。その上に丸餅を、四隅に三角形になるように3個ずつと、北・南・東の縁の中央に3個ずつ、計21個を並べる。これは金具隠しの意味であるという。次に洗米を、三蓋松と三日月の近く（西側）に1カ所と、中央近くに2カ所小さく盛る。その上にクルミときび団子を盛る。さらにその上に、米ハゼを大きく盛り、山のようにする。これは、白山の大御所・別院・奥の院であるという。一番西端の山が、大御所でその上に行灯を置く、これは、雲を表すという。また串柿を10個ずつ四隅に斜に並べる。慶安本では、7個になっている。あとは、全体に洗米・クルミ・串柿・米ハゼ・粟・カヤ・焼ドウフを撒く。



写真14 菓子盛り（白紙を敷く）

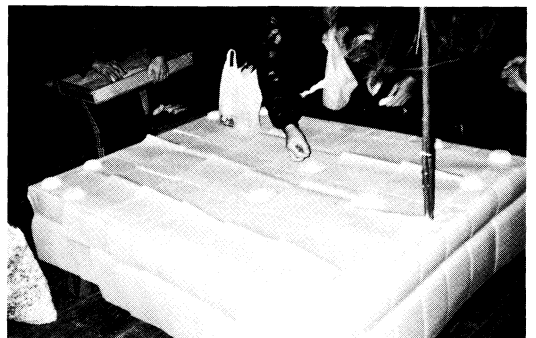


写真15 菓子盛り（洗米を山になるところへ置く）



写真16 菓子盛り(串柿を置く)

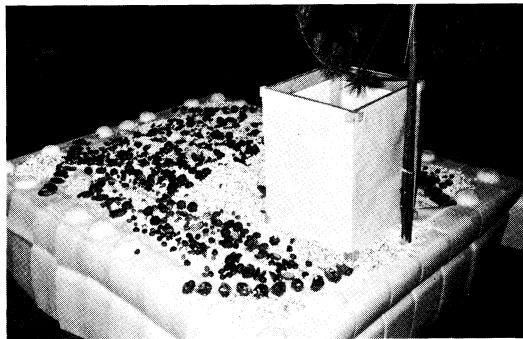


写真17 菓子盛り(完成)

慶安本によると、菓子盛りは次のようになっている。「一、菓子の台ニ入ル物紙・のり・はけ・ふちのもち廿一・三つ足六ツ・くしかき五くし・続松式たい・行灯の笠・しよくだい・ほうき式本・はらい・せり・大根此三色はこまかにしてよりかけにてたはね、三把つゝ三ツ足ニ盛也 ほうきハ床なをし過て座敷はく為也(略)一、煎大豆・米はぜ・小柿・胡桃・かちくり・かや・干梅其外何にても菓子のり物若輩衆より出合也、干梅は吸物の膳に付なり 一、菓子の台、紙にてはり四方へはりさけるなり、扱菓子を三社の山の躰に盛なり、(略)」現在は三ツ足などはないが、基本的には、同じである。

㊦. 神饌の用意

神酒・洗米・鏡餅・水・塩・ワカメ・ノリ・ゴボウ・ニンジン・ヤマイモ・ワサビ・タマゴ・鱒・鯉・菓子などを神饌として、拝殿に並べる。

以上の作業は、だいたい6時30分頃終了する。

(4). 六日祭

①. 神事

13時から、宮司・献幣使などが、拝殿に入り、祓い・祝詞などの神事を行う。

②. 延年

㊦. 酌取り

13時30分頃、神事が終り、酌取りにはいる。西側に袴姿の4人(笛役)が座り、その前に、焼ドゥフ2個・きび団子2個と箸が入った白木の膳が置かれてある。なお、慶安本では神主・院家・院主・学頭・老僧などが座り、膳には「むめほし・ひらきまめと吸物」が出された。東側には、2名の上酌(白衣・白袴・帯刀)と2名の下酌(上酌と同じ服装で、その上に黒の褌綴を着る)が交互に「しりつ」(爪先を立てて座る)する。

㊦. 箒の清め

上酌2人が、竹柄の箒を持って、図3のように舞台を1回りする。



写真18 酌取り

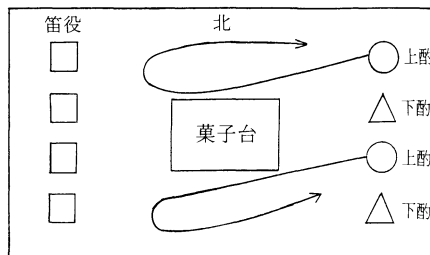


図3 酌取り(箒の清め)

⑥. 膳直し

上酌が、図4のように動き、①と②で、笛役の前に置いてある膳を直す。なお、座り方は、上酌下酌とも、肩を振りながら、小さく右足から3歩退って、しりつする。手に何も持っていない場合は、手を腰にあてる。以下同じである。

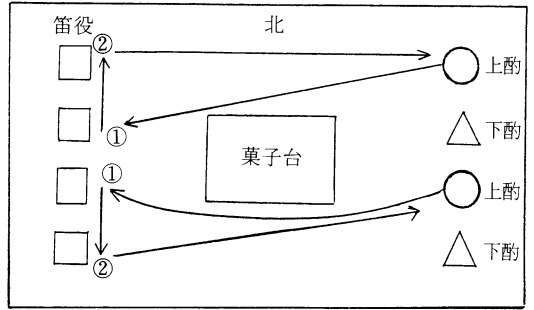


図4 酌取り(膳直し)

⑦. 見せ酌

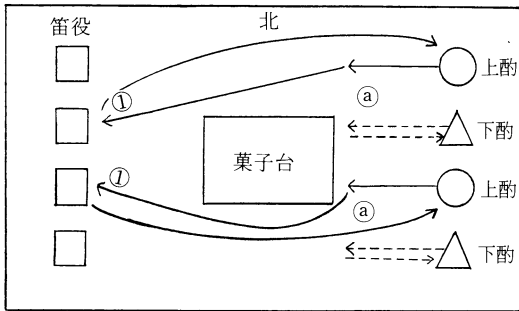


図5-1 酌取り(見せ酌①)

下酌が盃を持って出て、しりつし、そのあとすぐ上酌が出てしりつする。①で盃を下酌から上酌に渡す。同時に立ち、下酌は元の位置に戻り、上酌は①の笛役の前でしりつし、盃を置き、元の位置へ戻る。

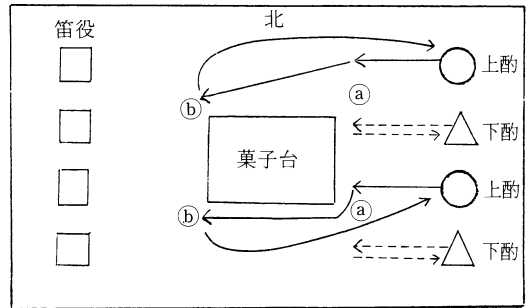


図5-2 酌取り(見せ酌②)

下酌が、長柄の銚子を持って出る。上酌は、①で長柄の銚子を受け取り、②で目通りに持った長柄の銚子の前を上げるようにする。

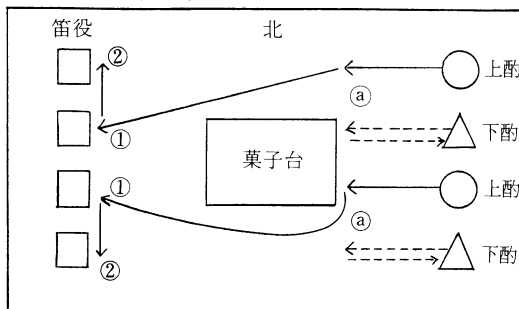


図5-3 酌取り(見せ酌③)

前と同じように、①で長柄の銚子を受け取った上酌は、①で二献つぎ、②で一献つぐ。②の位置にいる笛役は、盃を持ったままである。(盃は、上酌が持って移動させる。また酒をつぐ動作の時は、しりつして行く。以下同じ)

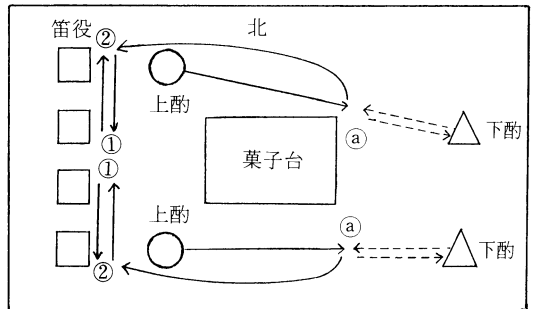


図5-4 酌取り(見せ酌④)

上酌は②から①へ移動し、同時に下酌は、ひさげを持って①へ出る。上酌は①で下酌の持つひさげから酒を二杯受ける動作をする。②で二献つぎ、①で一献つぎ、②で二献つぐ。前と同じように①で下酌の持つひさげから酒を受け、②で一献つぎ、①で一献つぎ、②で一献つぐ。②の笛役は、盃を持ったままである。すなわち、図5-4の動きを2回する。

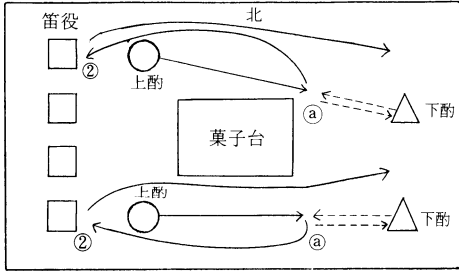


図5-5 酌取り（見せ酌⑤）

上酌は①で下酌のひさげから酒を受け、②で一献つぎ、盃も持って戻る。

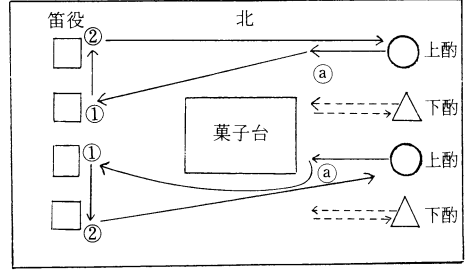


図5-6 酌取り（見せ酌⑥）

上酌は①で、下酌からすしの膳を受け取り、①と②でそれぞれ二はさみずつ膳に置き、戻る。

上酌は①で、下酌から長柄の銚子と盃を受け取り、①で二献、②で一献つぎ、②の笛役は盃を持ったままである。（動きは、図5-3と同じ）

前と同じように、上酌は①で下酌のひさげから酒を受け、②で一献つぎ、盃も持って戻り、下酌に渡す。（動きは、図5-5と同じ）

上酌は①で、下酌から長柄の銚子と盃を受け取り、菓子台中央の南北両側にしりつし、盃を菓子台の下に置き、長柄の銚子の柄を内側にして盃の左側に置き、元の位置に戻る。

上酌は、再び菓子台中央でしりつし、盃を左側に、長柄の銚子の柄を外側に直してから、長柄の銚子を持ち、次に盃を持って戻り、下酌に渡す。

次に、行灯・松・抱瓶子を撤去し、菓子台を南に向けてあけ、菓子を見物人に向かって撤く。その後、舞台を掃いて、酌取りは終わる。

この酌取りは、正月の修法を終えたのちの修正会の宴会を表現している。今は形式だけとなっている。慶安本によると、宴の間に「菓子讚め」という儀礼があるが、今はこれも省略している。

①. 当弁

太鼓役（袴姿）が笛役に並び北の隅に座る。笛（六孔の横笛）・太鼓（締太鼓）のはやしが始まる。上酌は控の者（後見）となり、当弁竿を持つ。まず、梅が登場する。梅の衣裳は、冠をかぶり、小袖の上に緑色地に梅と鶯模様の狩衣を着て、白袴に白足袋をはく。梅は控の者から当弁竿を受け取り、左手を前にして両手で持ち、右手には中啓も持って、図6-1のように動く。足の動きは、図6-1の1~6が図6-2（次ページ）のA、6~8と9~11がBである。梅は、図6-1の9の位置で、「夫梅は百木の先に開きて勾千秋の嵐をふくむ、目出度かりける此時かな、かかる殊勝の砌に候間、是は梅と申すもの也」と申し立てる、10の位置の時、竹が登場する。（図6-1のaの位置）竹の衣裳は、梅とほぼ同じであるが、冠と、狩衣が竹と雀の模様になっている点が異なっている。梅と同じように、当弁竿と中啓を持ち、図6-1のように動く。iの位置で、「夫竹は万歳の世々を



写真19 当弁

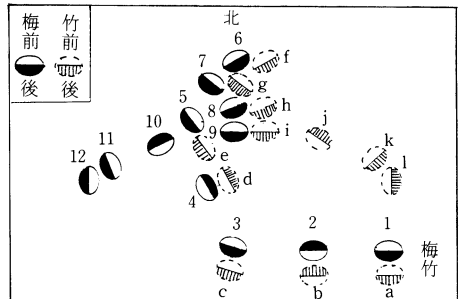


図6-1 当弁の動き

重ねて一天に納まり、目出度かりける折節かな、かかる殊勝の砌に候間、是は竹と申すもの也」と申し立てる。一方梅は、竹がcから1まで動く間、12の位置にいる。その後、梅と竹は、当弁竿を控の者に渡し、床几に掛ける。

なお、「当弁」は「答弁」とも書かれている時がある¹⁴⁾。それについて、本田安次氏は、多武峯の例をあげて、当弁とは、開口に続くもので、人数は不定、開口の早物語を題材に、自ら設題し、それに対する秀句を言うことによって、興を催させようとするものであったと述べ次に、「當辨はもと、相當の教養があり、頓智にもたけたものが出て、當意即妙に演じたのかも知れない。"當辨"の名稱も、當意即妙に辨ずる意味に出たのではあるまいか。尤も問答體の秀句もあったのだから、答へ辨ずると書いてもよかつたわけである」と述べている。なお、長滝の当弁については、原形と著しく異ったものになっているとしている¹⁵⁾。それに対して、五来 重氏は、興福寺の例をあげて、「二人の當辨と一人の答辨は別物と見なければならぬ」としている。さらに、慶安本の中の「延年の坊」・「当坊」に注目して「六日祭の當坊は費用を辨済するけれども花形の舞をすることができたのであろう。すなわち大きな幣帛をもって最初に権現に拝礼し、祝言をのべて祝福をあたえる役が"當辨"であったと思われる。この語には山伏のすきな公家の官職名のひびきがあり、頭中将などの頭と辨官の辨を合わせて、頭辨(頭の辨)などとしたのではないかという想像もできる。私はこれをもじって当辨としたのではないかともかんがえている」と述べている¹⁶⁾。

㊦. 露払

「ヒーヒヤ」・「乱拍子の猩々」とも呼ばれる。しゃぐまに鬼面をつけ、緋の陣羽織風の上衣に、淡紅色のたっつけ、黒足袋・腰には太刀をはき、扇を右手に持って、図7-1のように、順に2回、逆に1回まわる。図7-2は、1~10、12~20、22~29にかけての動きで、図7-3は、11での動き、図7-4は、21と30の動きの一部で、図7-3に続く。なお、露払は慶安本の中には、書いてない。本田安次氏は「惑は乱拍子の一個が独立したのかも知れない¹⁷⁾」と述べている。

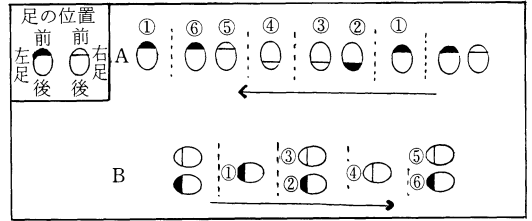


図6-2 当弁の足の動き

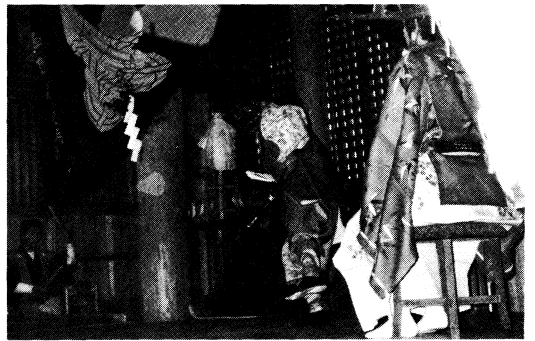


写真20 露払

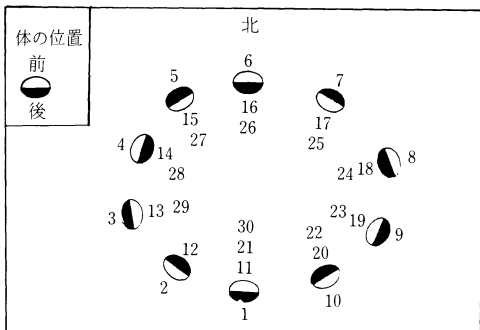


図7-1 露払の動き

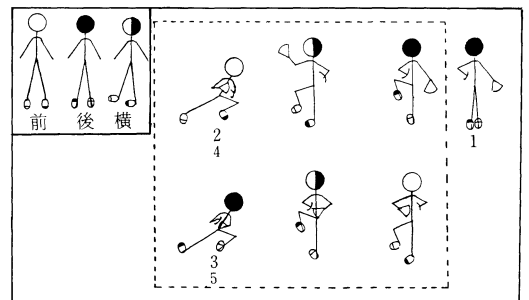


図7-2 露払の動作①

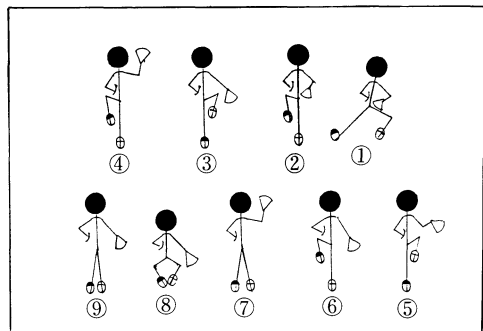


図7-3 露払の動作②

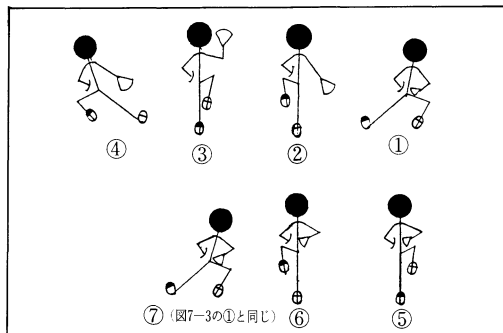


図7-4 露払の動作③

㊦. 乱拍子

金色の立烏帽子に緑色の狩衣、紫地の袴に白足袋をはき、開いた扇を右手に、左手には菊の造花を持った稚児2人が出て、正面から順回りに2回、逆に1回まわる。逆にまわる時は、順の時に後にいた稚児が先になる。歩き始める時は、体の重心を三・四度と前にかけてから足を出す。正先では、左右左右左と五度足拍子を踏む。

慶安本では、「乱拍子思々の出立にて舞也、狂言の心も不苦」とあり、今とは異なっていた。また、露払と乱拍子との関係について、五来 重氏は、「これは「乱拍子」の中の「露払」であってその趣向が「猩々」をあらわす鬼と、潯陽の菊の精をあらわす稚児」であるとしている¹⁸⁾。

㊧. 田歌

「おた」ともいう。当弁は、当弁竿を控の者から受け取って相向って立つ。同時にふし役(袷姿)が南を向いて神前奥寄りに立つ。ふし役は、本を持って歌う。各句の最初の言葉だけふし役のみが歌い、次のくり返しの部分から笛役も加わって歌う。それに合わせて当弁は、当弁竿を左右に振り、振る方と反対側の足を後に蹴上げるようにする。ふし役は、当弁と反対側の足を後に蹴上げる。なお、伴奏は太鼓のみである。歌詞は次のようである。

「一、(ほつと) 新玉の新玉の年立帰る朝よりそよの
 一、(ほつと) 我か山の我か山のしやうしの御連
 注幾重引そよの
 一、(ほつと) 納れる納れる代に逢坂の関の戸を
 そよの
 一、(ほつと) 大黒の大黒の指上げの槌は何つち
 よそよの

なお、「そよの」は雑し詞である。この田歌は、年始の祝歌というかたちであり、具体的な農耕のストーリーで構成されたものではない。

歌が終わった後、当弁は当弁竿を控の者に渡す。当弁竿は、楽屋へ運ばれる。



写真21 乱拍子

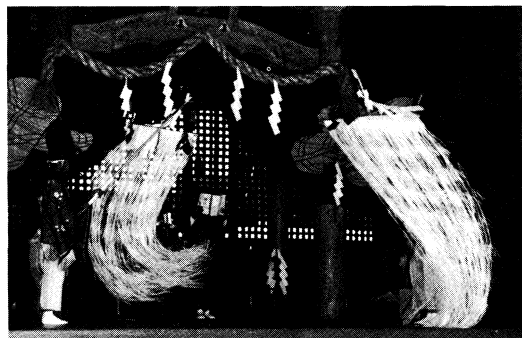


写真22 田歌

(地) 朝より朝より待るゝ物ハ鶯の声そよの
 (地) 幾重引幾重引七重も八重も重ての引
 そよの
 (地) 関の戸を関の戸を月影ならて指よならまし
 そよの
 (地) 何つちよ何つちよ廿四の作り物打出の小
 槌重ての引そよの」 (慶安本より)

このころから花篝（人梯を作り、拝殿に吊してある五蓋の花笠を取る）が始まる。

㊦. 花笠ねり歌

慶安本では、「次花笠出る、数ハ不定、若輩ノ人数次第也」とある。この花笠は、風流であり、「田植風流の流れをくんでいた¹⁹⁾」と思われる。

現在は、花笠は出なくて、当弁だけが演技を行う。花笠ねり歌（「大裏やついな夜半の 杉障子 明くれば やがて春にこそすれ」）を笛役が歌う。慶安本では、当弁が、花笠に向かって歌うことになっている。当弁は、図8-1のように動く、歌の間に1~6の動作をする。図8-2はその時の脚の動きである。3の時に、前方に体を傾ける。歌が終わると笛・太鼓が始まり、梅から先に3回順に回り、27の位置に移動し、それから入れ替って28の位置になる。次に奥の両柱前の31の位置に正面を向いて立つ。足の動きは、図8-3のAが6~26, Bが26~27, Cが27~28, Dが28~29・29~30・30~31である。

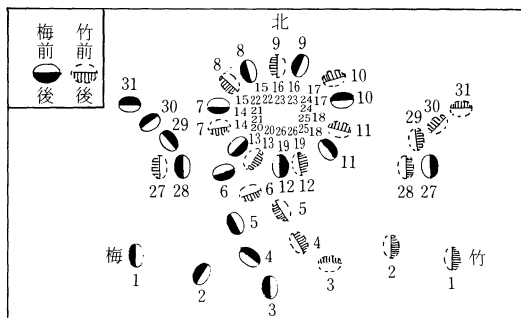


図8-1 花笠ねり歌の動き

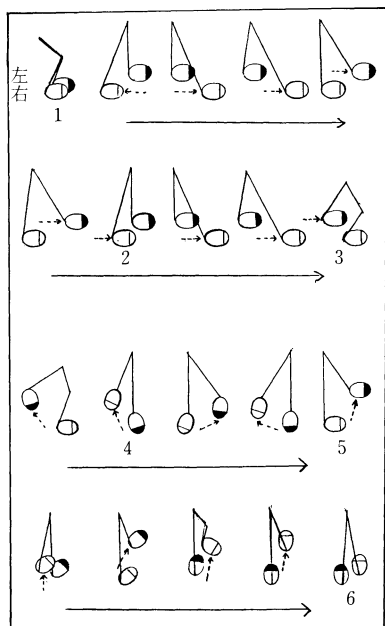


図8-2 花笠ねり歌脚の動き

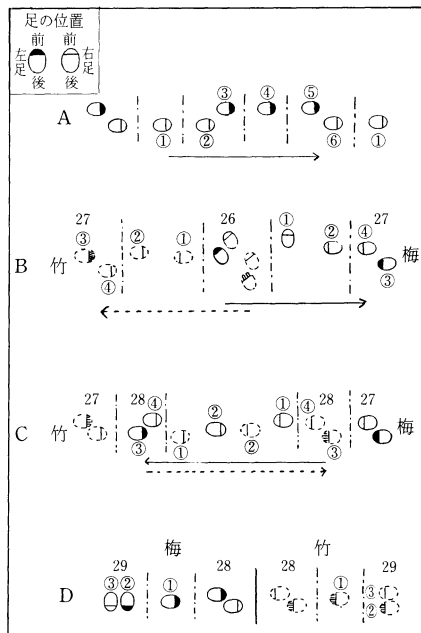


図8-3 花笠ねり歌足の動き

㊧. 当弁ねり歌

梅は梅の歌（実際は笛役が歌う）の「ぬる共花」で前進を始め（太鼓も始まる）、地の歌の「ぬる共花」で後退を始める。同時に、竹は前進を始める（竹の場合は、右足から出る）。こうして、梅と竹とが交互に前進後退（梅は3回半、竹は3回）を続ける。図9-1は、その時の梅の脚の動きである。梅の歌が終わると、梅は掛声とともに後に下がる（掛声は3回）。次は竹の歌となり、竹から出



写真23 当弁ねり歌

て、竹が退る時に梅が出る。次に梅、さらに竹となり、「匂いこそすれ」で図9-2の1~4の動きをする。以下は歌わない。

歌詞は次のようであり、連歌の形式をとっているようである。

「梅（ほつと）桜狩雨は降りぬ同ハぬる共花の

（地）影に宿らんぬる共花の

梅（ほつと）雪しはしおもけなるぬる共花の

（地）影に宿らんぬる共花の

梅（ほつと）面白や同はぬる共花の

（地）影に宿らんぬる共花の

竹（ほつと）情有散もちらぬも山里の桜か本の

（地）花の下風桜か本の

竹（ほつと）さなからに雪そ降桜か本の

（地）花乃下風さくらか本の

竹（ほつと）殊更に此春ハ桜のもとの

（地）花の下風桜か本の

梅（ほつと）花かよと霞の内に降雪ハ木末木末ハ

（地）白雪の色木すゑ木すゑハ

梅（ほつと）雁金も折からに木末木末ハ

（地）白雪の色こすゑこすゑハ

梅（ほつと）狩きぬの袖枕こすゑこすゑハ

（地）白雪の色こすゑこすゑハ

竹（ほつと）花も只古き情を忘ねは昔の人の

（地）袖そ床敷むかしの人の

竹（ほつと）橋の香を留てむかしの人の

（地）袖そ床敷むかしの人の

竹（ほつと）匂ひこそすれむかしの人の

（地）袖そゆかしき昔の人の」（慶安本より）

次に梅を先に、笛と太鼓のはやしで、逆に3回まわる。図9-2はその動き、図9-3は1~4の脚の動き、図9-4は5~21の足の動きである。21の位置で一礼し、楽屋に戻る。

このころ花奪いが最高潮となる。当弁が退場する頃、花が低くおろされ、群集がこれを奪い合う。

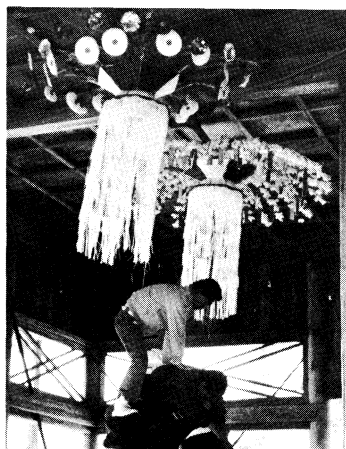


写真24 花奪い

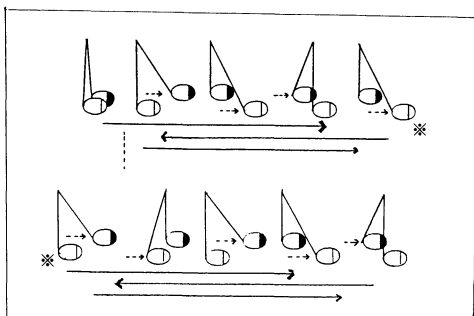


図9-1 当弁ねり歌の脚の動き①

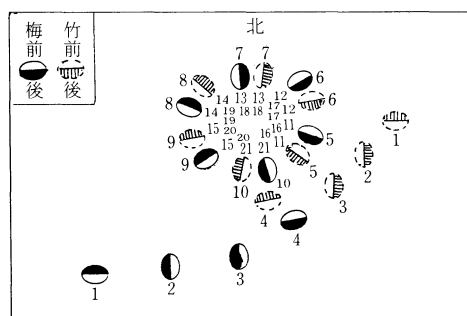


図9-2 当弁ねり歌の動き

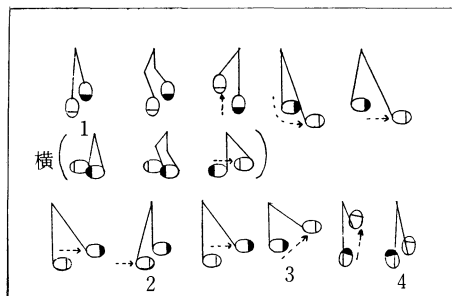


図9-3 当弁ねり歌の脚の動き②

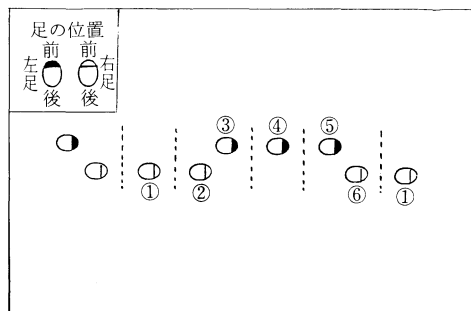


図9-4 当弁ねり歌の足の動き

②. しろすり

田打ちともいわれている。服装は襦袢に黒の袴を掛け、端は背中へたらす。緋のたっつけに黒足袋・白鉢巻・木製の鍬を肩に、木製の鎌を後腰にさし、「東西東西」と唱えながら、図10のAの動作をし、神前を3回まわる。正先で鍬の柄を下にして、鍬先を神前に向けて一礼し、次に笛・太鼓役の前で先と同じように一礼して挨拶し、神前に戻る。太鼓に合わせて、左右左と足踏みし、笛が入り、図10のBの動作をし、次にCの1・2の動作を3回、Cの3・4の動作を3回行ない、これをもう一度くり返し、さらにDの動作を行い、舞台を一回りして元へ戻り、鍬を立てて、ポチ(子・新発意)を呼ぶ。ポチが来ないので、再び笛・太鼓役の前で挨拶し、前の動作をくり返す。再び呼ぶと、同じ服装のポチがあらわれる。二人揃って笛・太鼓役に挨拶し、二人共Bの動作をし、次に子(ポチ)がCの動作をする時、親は鎌を取って、鍬の柄を使い刈取りの動作をする。再び二人一緒にC・Dの動作をする。二人揃って笛・太鼓役の前で挨拶し、再びB・C・Dの動作をする。次に歌に合わせてEの動作をし、退場する。



写真25 しろすり

歌の歌詞は次のようである。

「花が見たくば吉野へござれ吉野は名勝花所
紅葉見たくば龍田へござれ龍田は名勝紅葉所
月が見たくば武蔵へござれ武蔵は名勝月所

さあいかにも繁昌見てさかな
さあいかにも繁昌見てさかな
さあいかにも繁昌見てさかな

なお、慶安本によると、「次に田踊、毎年替ル 田踊の装束ハ女出立にて五七人も出てをとる也」とあるが、現在はない。さらに「次俱舎 老人也」とあるが、これも現在はない。

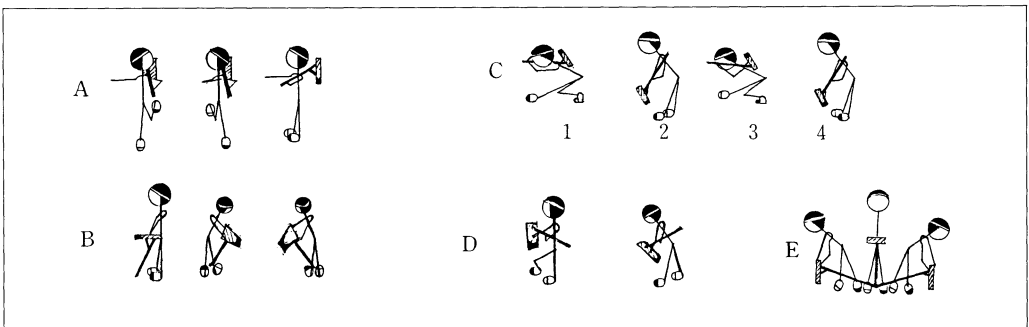


図10 しろすりの動き

③. 大衆舞

掛声から「はっさい」ともいわれる。烏帽子・紋付・袴をきて、扇を持つ。神前で足踏みをして、図11-1(次ページ)のように動く、その時の動作は、図11-2(次ページ)のとおりであり、Aは5~7・20~32・32~34, Bは9~11・24~26・36~38, Cは13~15・40~42, Dは47~53である。

大衆舞が終わると、延年はすべて終了する。

しかし、慶安本では「次はかいこ 老人」と「次に立合 四人」とあるが、現在はなくなっている。



写真26 大衆舞

なお、本来は、開口と立合というものは、延年の芸能を始めるにあたって、最初に行われるものである。

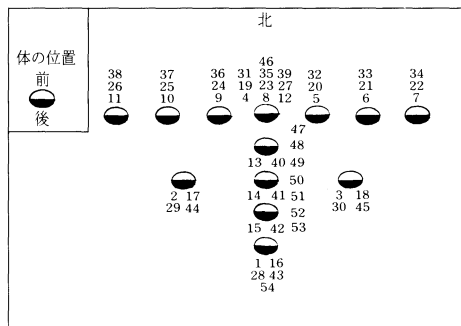


図11-1 大衆舞の動き

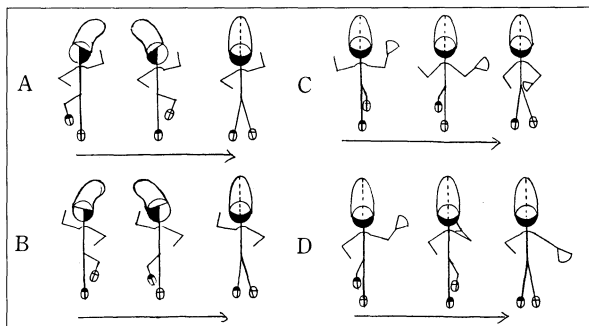


図11-2 大衆舞の動作

4. おわりに

なぜ、長滝に延年が現在まで伝承されてきたのか。1つには、祭りの運営の仕方である。それは、明治の神仏分離令以後、延年を一山だけではささえきれず、絶えることを恐れた僧たちが、明治3年(1870)に30日間かかって、初めて地元の人々(白山長滝神社の氏子)に延年を教えた。それ以後、延年は、氏子の手によって実施されてきた。このことは、農耕の神(白山神は農耕を司る水分神として民衆に信仰されていた)・養蚕の神²⁰⁾としての白山長滝神社に対する氏子の信仰とあいまって、氏子達は、自分達の祭りとして、従来の形を変えずに伝承する努力をしてきた。それは、祭りの準備や役割に、全員が参加することや、祭りの役に指導役があることから推測できる。

もう一つは、慶安本が残っていることである。これには、祭りの次第がかなりくわしく書かれてあり、延年を実施するにあたり、大いに参考になったと思われる。さらに、山国であるという地理的条件も影響したのではないかと考えることができる。

以上の条件から、長滝に延年が今日まで伝承されてきたと思われる²¹⁾。

註)

1) 白山信仰は、かなり広い地域にわたって存在する。その例証として、府県別の白山神社数をあげると、次のようになる。これは、大正2年(1913)の「内務省神社局神社明細帳」による。

岐阜525、福井421、新潟232、愛知220、石川156、富山106、埼玉102、長野96、群馬93、秋田86、山形76、静岡56、千葉53、栃木44、福島42、茨城41、東京40、宮城30、滋賀27、岩手27、三重26、山梨25、福岡22、神奈川21、奈良15、徳島14、佐賀12、京都11、熊本11、兵庫10、青森9、大分9、和歌山7、高知7、鹿児島7、大阪6、長崎6、山口6、愛媛6、鳥取4、香川3、島根2、岡山2、広島2、計2,716社

これからも分かるように、岐阜県を始め、中部地方が多い。特に太平洋側の分布は、白山長滝神社の影響が強かったのではないと思われる。

なお、この資料については、石川県の白山比咩神社からご教示を得た。

2) 「白鳥町史・通史編・上・下」白鳥町・昭和51・52年を参考にした。

3) 諸橋轍次・鎌田正、米山寅太郎「広漢和辞典・上巻」大修館書店、昭和56年、1219頁

4) 同上

5) 本田安次氏は、「延年」(木耳社・昭和44年)の中で、「最も早い例は、『左經記』、『御堂關白記』、『小右記』等に見える寛仁2年(1018)10月16日の、女御藤原威子を立て、中宮とする式の行はれた日の記事である」と述べている。

6) 本田安次「延年」木耳社 昭和44年 43頁

- 7) 五来 重氏は、『講座日本の民俗宗教 6 宗教民俗芸能』の中の「長滝六日祭延年と修験道」の中で、延年と修験道との関係を強調している。
- 8) 三隅治雄他「民俗芸能事典」東京堂 昭和56年を参考にした。
- 9) 本田安次前掲書 50頁
- 10) 「広報しろとり」(「しろとりの歴史散歩」) 昭和61年1月
- 11) 筆者との話し合いの中で述べた
- 12) 「白鳥町史・史料編」白鳥町 昭和48年 481頁 以下慶安本の引用は、「白鳥町史・史料編」による。
- 13) 「六日祭花の覚」
- 14) 新井恒易「農と田遊びの研究上」明治書院 昭和56年 601・2頁
- 15) 本田安次前掲書 183・4頁
- 16) 五来 重他編「講座日本の民俗宗教 6 宗教民俗芸能」弘文堂 昭和54年 225・6頁
- 17) 本田安次前掲書 724頁
- 18) 五来 重他前掲書 232頁
- 19) 新井恒易前掲書 610頁
- 20) 坪井市次郎氏は、『広報しろとり』の「しろとり歴史散歩」(昭和61年1月)の中で次のように述べている。
「六日祭りが養蚕の神を祀ることになったのは、源頼朝が平家を攻める時、源氏の武将木曾義仲が三カ所の馬場(美濃・越前・加賀)に戦勝祈願をし、大勝したので、白山中宮長滝寺に真綿を献納したことから、豊蚕の祈願が加わったと伝えられている」
- 21) 若宮多門氏からご教示を得た。

〈主要参考文献〉

- 「白鳥町史 通史編上・下, 史料編」白鳥町 昭和48・51・52年
新井恒易「農と田遊びの研究上」明治書院 昭和56年
本田安次「延年」木耳社 昭和44年
五来 重他編「講座日本の民俗宗教 6 宗教民俗芸能」弘文堂 昭和54年